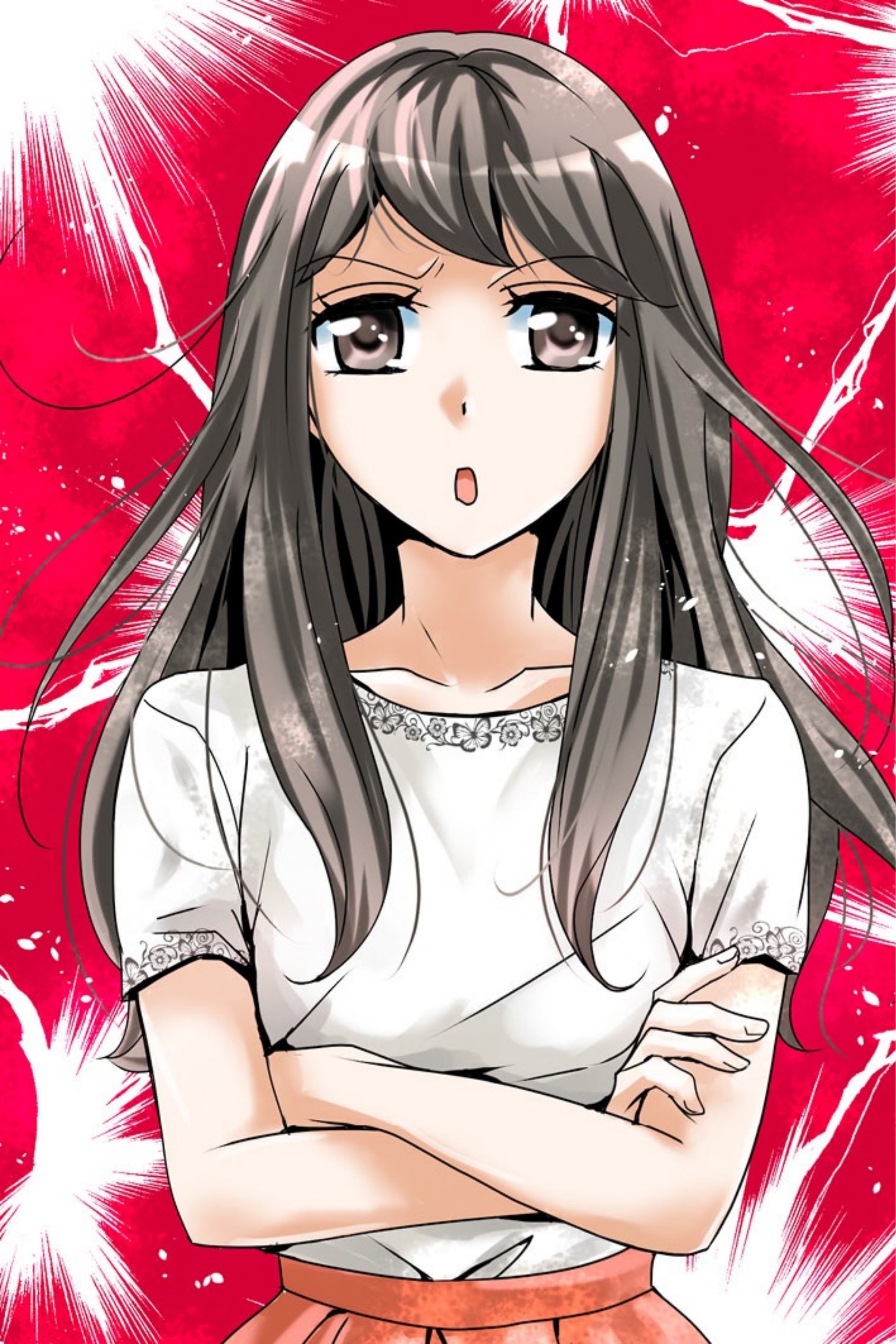
ナイショにしないと

花緒みゆ・作
こりすキョーコ・絵

ナイショにしないと

昼下がりの大学のキャンパスで、
夢(ゆめ)ちゃんが、僕を呼ぶ。

「犬(いぬ)、のどが渇(かわ)いた。
買ってきて」



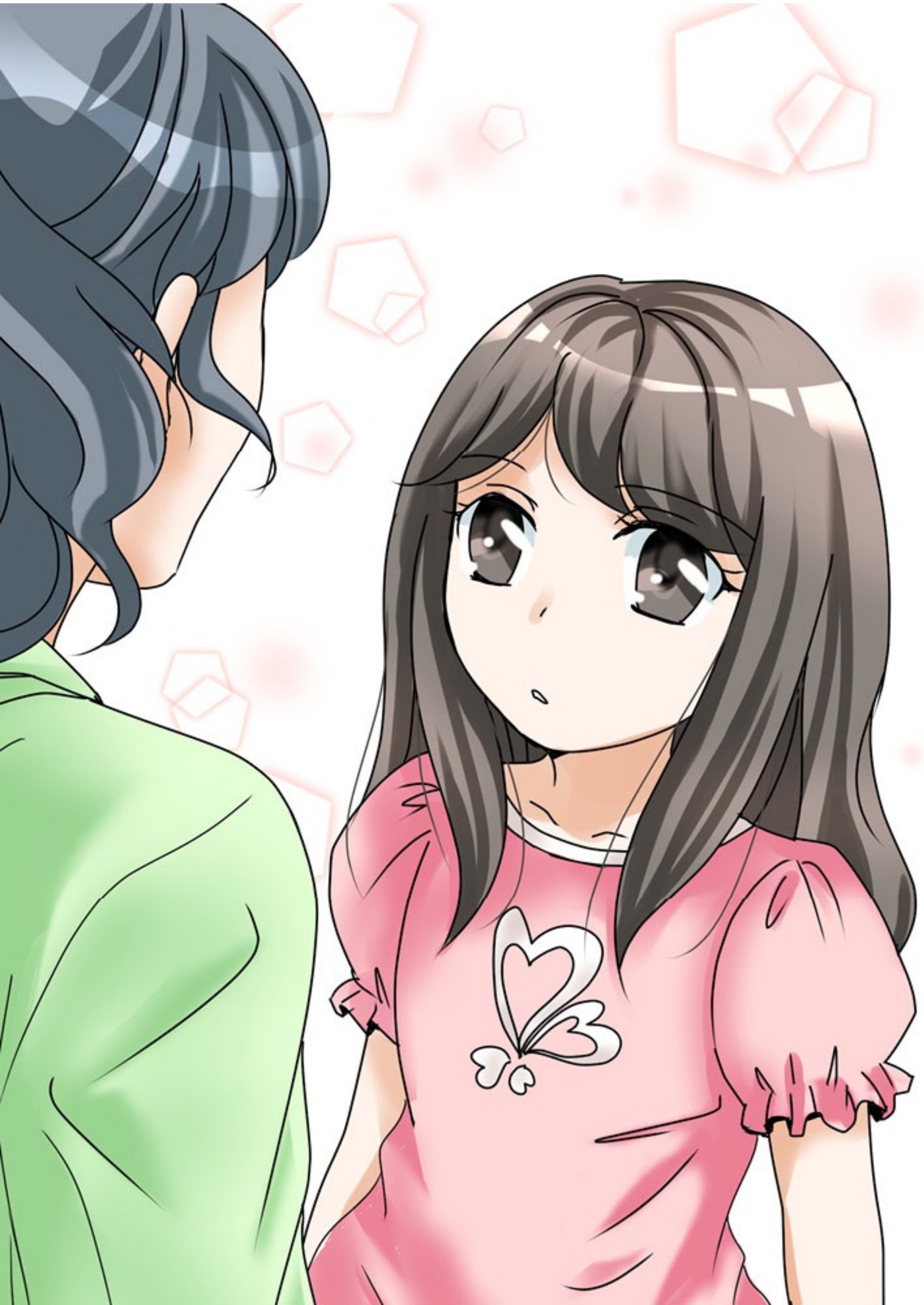
「ワン！」

歓(よろこ)んで！　の意味をこめて、
僕は返事をするのだ。

なぜ僕らの関係がこんなコトになっているのか……

それは、僕と夢ちゃんの幼馴染（おさなじみ）の関係がそうさせている……のだと思う。

夢ちゃんの母親、葉子(ようこ)さんは、
バリバリのキャリアウーマン。
夢ちゃんが生まれたときから、
家にお父さんはいなかった。
葉子さんの口癖(くちぐせ)は、
「男なんて、信用しちゃだめよ」
なのである。



「おとこってね、せっくすできれば、それでいいんだって」

これは、小学校のときの夢ちゃんの発言。母親の影響とは恐ろしい。

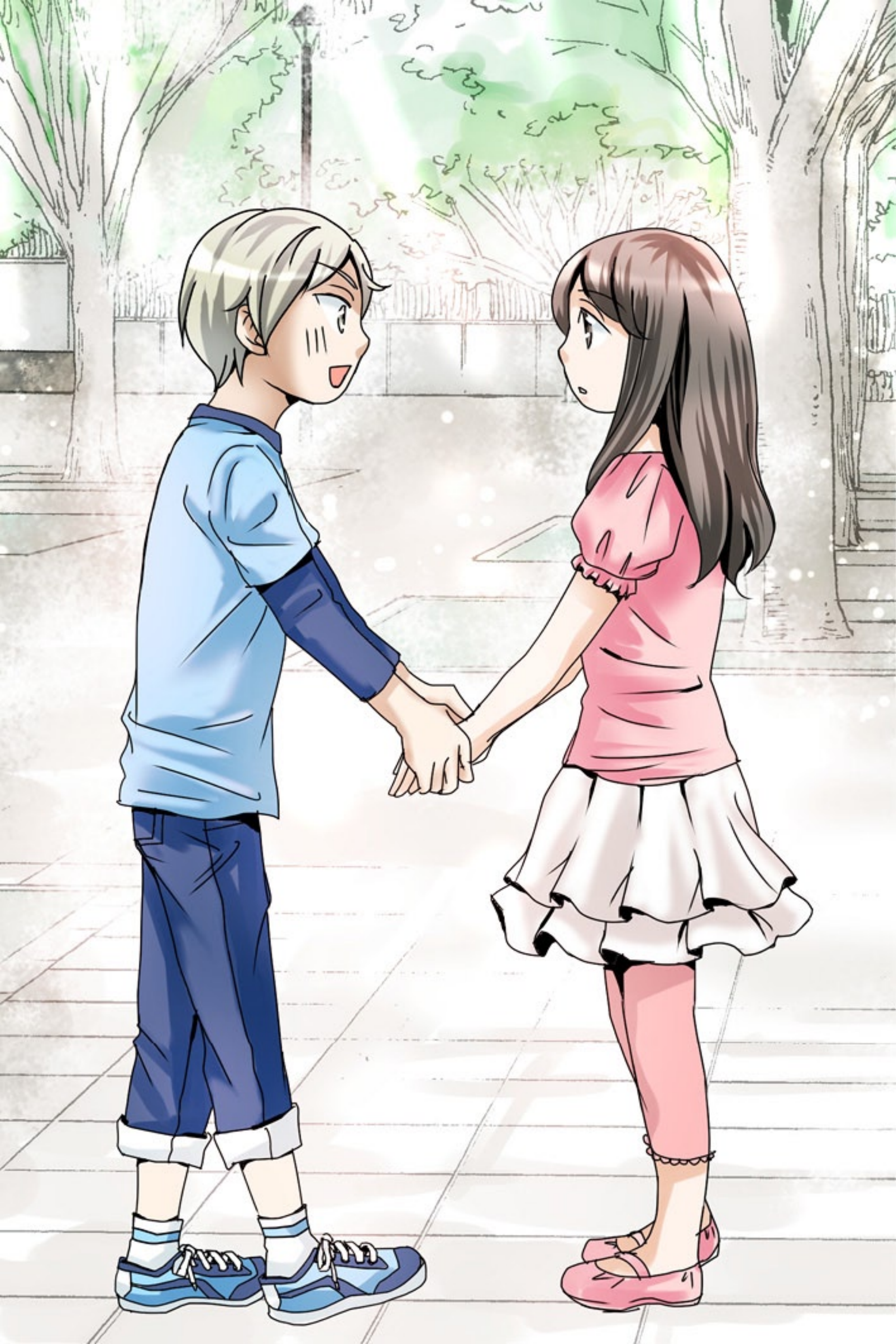
「そんなことない！」

僕は夢ちゃんが大好きだった。

「夢ちゃんの願いは、僕がなんだって叶(かな)えるよ。それが僕の幸せだから！」

「お母さんが、男は口ばっかりだから、信用しちゃだめだって言ってたよ」

「僕は口だけじゃない！」



そして、忠実な下僕（げぼく）としての、
僕の人生が幕を開けたのである。
夢ちゃんが望むなら！

給食のニンジンだって代わりに食べた。
夏休みの宿題の手伝いなんて当たり前！
高校だって夢ちゃんのために、ツーランク下の高校にした。担任には呆(あき)れられ、友達には笑われたけど、ほうっておけばいい。ほかの何よりも、夢ちゃんが大事なんだ。まいったか。

高校になってからの夢ちゃんは、

「犬！」

と僕を呼び、いつも傍（そば）にいるように命じた。

僕の名前は「白木原王」、と書いて、「しろきはら　わん」。

犬と呼ばれるのに、まったくもってふさわしい名だと思う。

断っておくが、僕と夢ちゃんには肉体関係は一切なかった。

ある時まではね。

夢ちゃんが望まないことはしない、望むことは、期待以上に叶える。

それが僕のあるべき姿だ。

僕という忠犬を従えた夢ちゃんは、大学に入学したとたん、

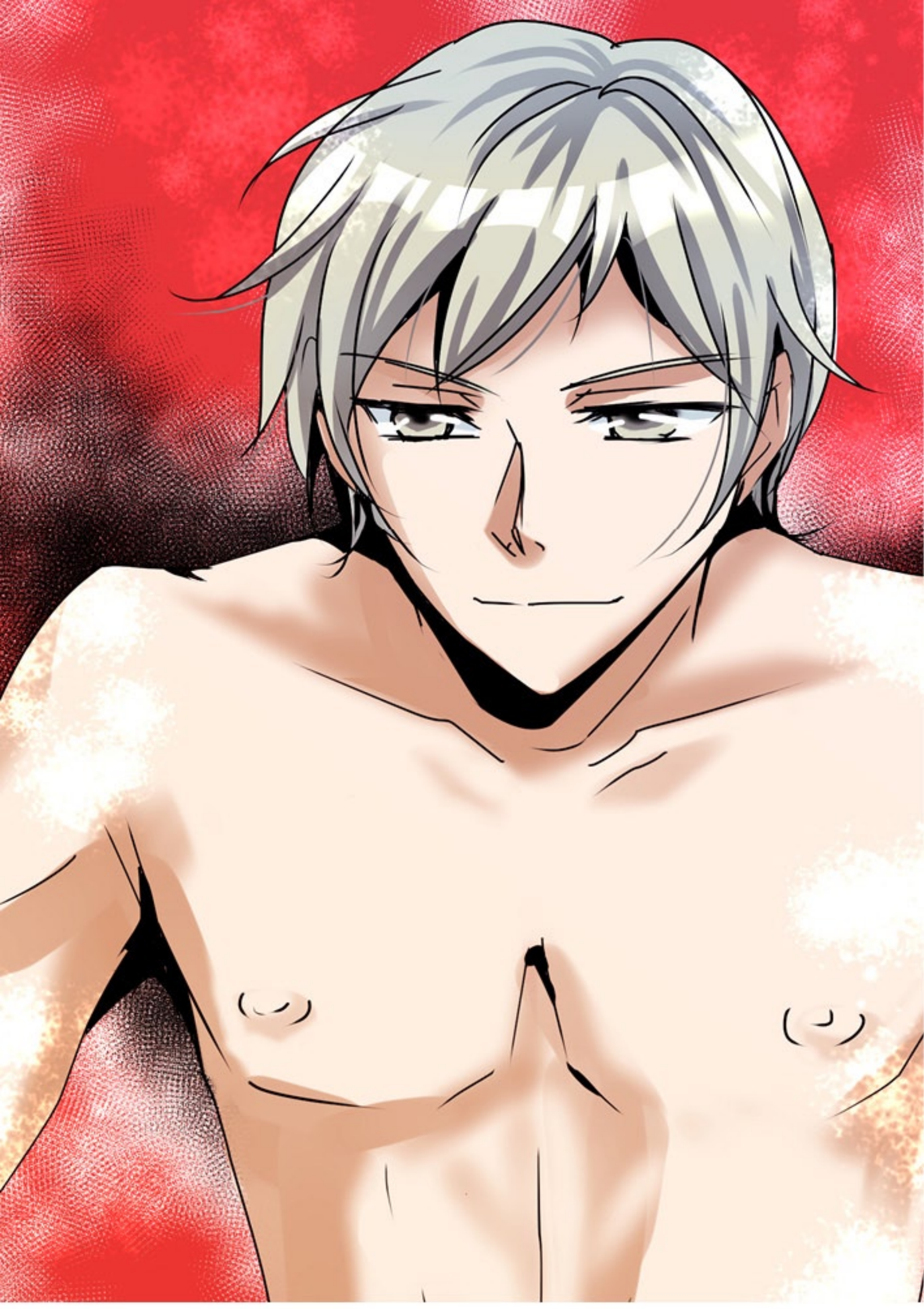
「ひとりで生きぬくための女子戦士同好会」にスカウトされ、

個性豊かなメンバーたちからも一目置かれる存在となった。

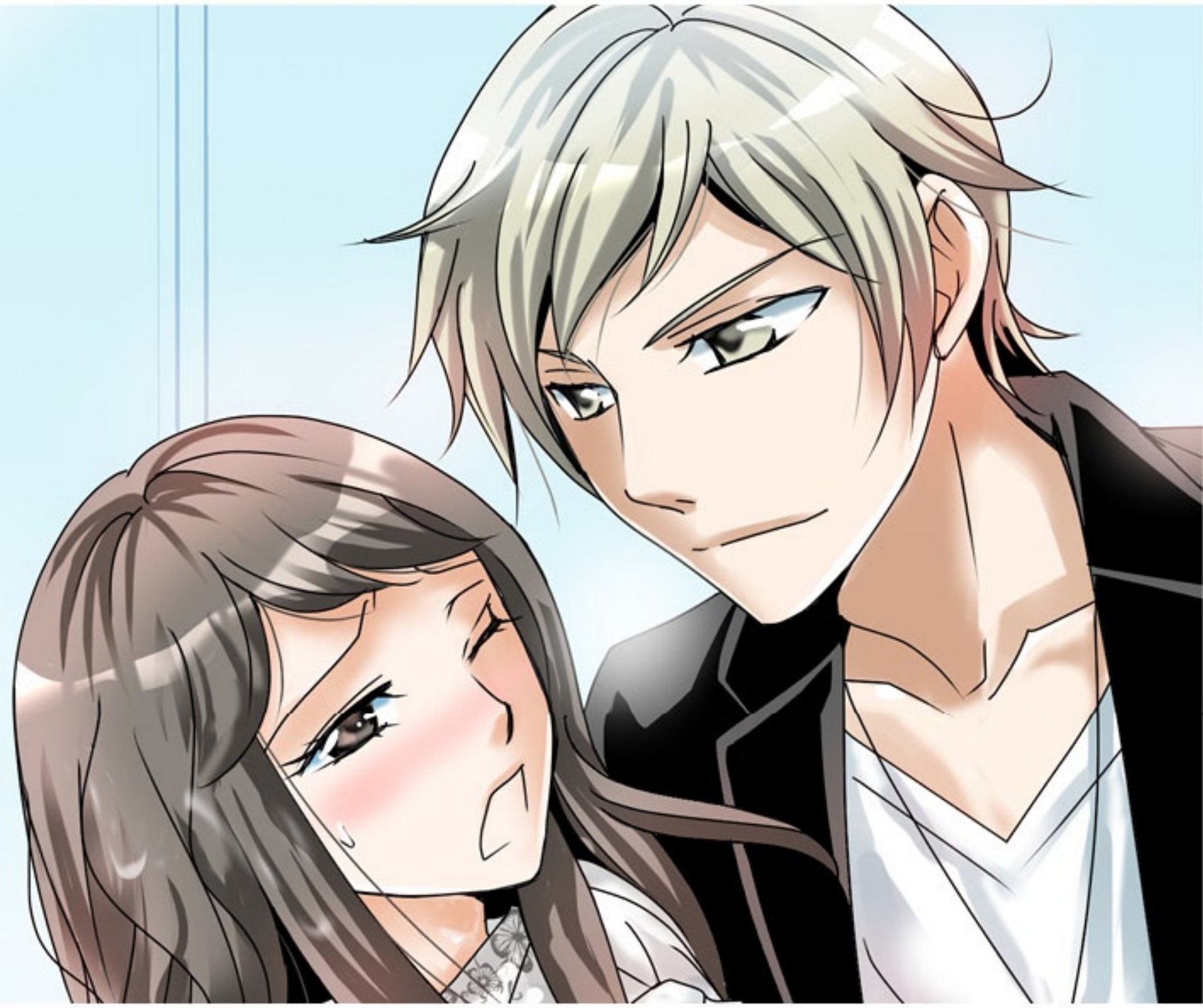
次期会長

しかし、それは……

世を忍(しの)ぶ仮の姿……



「ふたりきりになったら、
僕のこと、
なんて呼ぶんだっけ？」



そして、

僕らの関係は、逆転する。

夢ちゃんが…
初めて僕に…

……性的、興奮？

ンな声、出る……

『ナイショにしないと』

花緒みゆ／作
こりすキョーコ／絵

©2015　花緒みゆ / こりすキョーコ
©parsola inc.